

クラーク室内管弦楽団 第34回演奏会

“クラーク会館のクリスマス 2014”

2014年12月26日(金) 19:15 開演

北海道大学クラーク会館講堂

入場無料

プログラム

C. M. von ウェーバー (1786-1826)

歌劇「オベロン」序曲

F. P. シューベルト (1797-1828)

交響曲第7番ロ短調 D. 759 「未完成」(第三楽章付)

休憩

P. I. チャイコフスキー (1840-1893)

バレエ組曲「くるみ割り人形」作品71a より

W. A. モーツァルト (1756-1791)

「アヴェ・ヴェルム・コルプス」ニ長調 K. 618

指揮：奥 聡 (メディア・コミュニケーション研究院)

お問い合わせ：011-706-6595

(工学研究院・フロンティア化学教育研究センター 下川部雅英)

プログラム・ノート

ウェーバーの歌劇『オベロン』は、妖精の王オベロンと妻が「男と女、どちらが心変わりがしやすいか」ということで口論をはじめたことを発端に、純愛の男女を探すことを主題とした物語です。序曲は登場する妖精や恋人たち、あるいは嵐の様子など、劇中の要素を巧みに組み込んだ構成になっており、ドイツ・ロマン派を代表する質の高い作品になっています。

クラシック音楽の交響曲のなかでも、名前のついたものを挙げよと言われると必ず5本の指に入る**シューベルトの第7番交響曲「未完成」**。最初の2楽章の完成度があまりにも高く、それに続く第3、第4楽章を書くことができなかつたなど、さまざまな憶測がされているようですが、作品を最後まで完成させないということはシューベルトにとって、それほど珍しいことではなかつたようです。シューベルトは3楽章の途中までのピアノスケッチを残しています。本日そのピアノ譜をもとに再構築された3楽章付きで演奏します。

日本では年末のクラシックといえば「第九」が定番になっているようですが、欧米の国々では「**くるみ割り人形**」が絶大な人気を誇っているようです。チャイコフスキーのバレエの中では、比較的短時間であること、そしてなによりもクリスマスを題材にしたファンタジーであることがその理由であると思われる。雪の降る寒い夜、暖かい暖炉の前で、暖色の明かりに照らされたクリスマスツリーやたくさんのプレゼントなど、雪国北海道に住むものとしてはイメージがしやすい空間かもしれません。本日は組曲の中からいくつかを抜粋してお届けします。

モーツァルトの「**アヴェ・ヴェルム・コルプス**」K. 618は最晩年の小品です。病氣療養中の妻コンスタンツェが、バーデンでお世話になっていた旧知の合唱指揮者A. シュトルに感謝を込めて贈ったものです。モーツァルト自身、死の半年前で、借金にまみれ、ウィーンでの人気にも陰りが出ており、健康問題にもさいなまれていた時の作品ですが、そのような現実世界の影を何一つ感じさせない、穏やかな幸福感に満ち溢れた作品になっています。

さて、北海道大学のクラーク会館は、北大創基80周年を記念して、学生生活・課外活動の拠点となる学生会館として建設されました（1960年9月開館）。さらに、当時の杉野目晴貞学長の呼びかけで寄付をつのり、ドイツ・ボンのJohannes Klais社にパイプオルガンを発注。1966年5月に設置されました。「これからの総合大学は学問の場であると同時に、教養文化人として芸術を愛するものを育てる場である」という杉野目先生や当時の大学関係者の理念を体現しているのが、この空間であるといえます。音楽は、物理的には空気の振動の集合体にすぎず、演奏が終われば消えてしまうものです。それでも、その演奏を聴いた人あるいは演奏した人の心の中に「何か」が残るものでもあります。この「何か」が人間にとってとても大切な要素ではなかと考えます。現在の大学の状況を見ると「芸術を愛するものを育てる場」という大切な仕事をどの程度実現できているか、杉野目先生に怒られてしまいそうなほど心もとないのですが、本日このような時間を演奏者・聴衆のみなさんと共有できる場を提供してくれた北大の先人たちに感謝をしながら、心を込めて演奏したいと思います。

(メディア・コミュニケーション研究院 奥 聡)